

近世出版の 現場の情報を 生々しく伝える 板木の世界

「発見の感動」に 支えられて10年

私のこの10年間は、板木のためにあったようなものです。近世（江戸時代）から続く京都の本屋から板木を借りてきて、あるいは買い取り、ひたすらに掃除・整理をして拓本を振り目録を作る、ということを繰り返して来ました。調査・研究と言った聞こえはいいのですが、9割がたは力仕事です。もちろん授業をはじめ大学の日常業務もありますから、それだけにかまけていることはできません。結果、板木の仕事は休日ということになりがちです。2カ月間に休みが1日ということもたびたび。そんな過労死ぎりぎりの10年間、私を支えて来たのは「発見の感動」でした。



文学部 国文学科教授
永井 一彰
Kazuaki Nagai

プロフィール
永井一彰(ながい かずあき)
1949年岐阜県生まれ。大谷大学大学院博士課程単位取得満期退学。専攻は近世俳諧・近世出版。『日本名句集成』(学燈社)『蕪村全集・連句編』(講談社)などに執筆。



さらなる充実に
向けた課題

- 1 綿密な個別指導が求められるが、受講生が10名を超えるとそれが困難になる。かといって、興味を持って登録して来る学生を抽選で振り分けることもしにくい。
- 2 国文学科には実習準備室も実習室もない。その結果、あちこちに分散して置いてある史料を毎回時間かき集め、教室へ運び込みまた搬出しなければならず、事前・事後にかなりの時間を必要とする。また、講義用の教室ではやりにくい実習もある。
- 3 半期科目のため、あれやこれやと詰め込みすぎて、中途半端になってしまふ。
- 4 90分で一つのクールを区切りよく終えるのがなかなか難しい。受講生が多いと、それが一層困難となる。
- 5 4年間続けていると、ワンパターンになってくる。右のうち、1・2・3はシステムまた施設の問題で、私個人の力では何とも出来ません。この点については、システムの改良・施設の充実を求めて行きたいと考えています。4は私の工夫で切り抜かれる余地はあると思います。受講生諸君に90分間集中してもらうことも必要になってくるでしょう。5は偏に私の責任です。一旦は眼前にまばゆく開けた世界も、時がたてば色あせていくもの。感動を持続するには、私自身がよりまばゆい世界を開いていくしか方法はありません。また、そのきっかけを作ってくれる新しい史料を手に入れて行く必要もあり、なかなかハードです。



Classes Document

毎時間発見がある授業

- しかし、
- ☆一番楽しい授業。もっと、したい。90分では短い。
 - ☆出版の裏事情がよく分かる。
 - ☆板木が江戸の出版を支えていたことが実感出来た。
 - ☆普段触れない板木や版本に触れるのが感動もの。
 - ☆先生が楽しんで研究しているのが伝わって来る。
 - ☆毎時間、「発見」があるのが楽しみ。
 - ☆たぶん他の大学では体験できない授業。
- といった受講生の感想を聞くと、私は2カ月に1日しかない休みをゼロにして、過労死覚悟で孜孜として努める他に道は無いのかなあという結論に至るのです。



職人が刀を研いで試し切りをした痕跡(矢印)

板木は近世出版現場のさまざまな情報を実に生々しく伝えてくれる史料です。一例を挙げると、多くの板木には、彫りこんだ部分、つまり印刷しても写らないところに不規則な引っかき傷のようなものが認められます。最初は全く気にも留めなかったのですが、数多く見ているうちに「何の傷やろか」という疑問が生じて来ました。至った結論は、板木彫りの職人が仕事の途中で刀を研いだあと、試し切りをした痕跡(写真左)ではないかということでした。それが分かった時、私は職人の息遣いを感じたような気がしました。そういった数々の「発見の感動」が、過労死寸前の私をいくたびか蘇らせてくれたのです。

誰にも見えていない世界が自分の目の前にだけ開けた時、人はその感動を誰かに伝えたくなるものです。その衝動は、もしかしたら大学専門教育の原点なのかもしれません。もちろん、これまでも近世の出版機構や出版物については、言語文学・文学史・演習など、担当の授業で必ず触れるようにしていましたが、板木から得られる感動をそれらの授業の傍脇で語り尽くすことはとうてい出来ません。そこで、板木を通じて私に見えてきた世界を学生諸君に直接お近づける目的で設けたのが、平成15年度開講の「本と出版・実習」で、今年度で4年目になりました。この授業では、日本の出版史について概説し、和木についての基礎知識を身につけたあと、

- 和木をばらして、板木の彫り方を追体験してみる。
- ばらした和木を綴じ直してみる。
- 板木を使って拓本を撮る。
- 浮世絵の板木を参考に、色板の作成方法・多色摺りの技法を考える。
- 木活字印刷のやり方を再現してみる。

といった試みをして来ました。その間、板木で印刷したことが確認出来る最も古い史料と言われる平安時代の印刷物「淨瑠璃寺百体仏」や、昭和初期の木活字約3千個といった出版史料を入手する機会にも恵まれ、そのつとつとに受講生に紹介して来ました。ほとんど毎時間レポート提出というハードルがあるにもかかわらず、国文学科では数少ない実習科目ということもあって、受講生は生き生きと取